

報告

高齢者ボランティア活動に関する成人・高齢者を対象とした基礎調査：
混合研究方法による課題の検討

Issues of Elderly Volunteer Activities in Adults and the Elderly :
A Study on Mixed Methods Research

黒河内仙奈¹⁾*, 間瀬由記¹⁾, 末田千恵¹⁾

1) 神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科

Kana Kurokochi¹⁾, Yuki Mase¹⁾, Chie Sueda¹⁾

1) Kanagawa University of Human Services, Faculty of Health & Social Services, School of Nursing

抄 録

【研究目的】成人・高齢者への質問紙調査および対象者へのヒアリングにより、A市における高齢者ボランティア活動の支援における課題を抽出する。

【研究方法】2019年11月から2020年12月に、18歳以上のA市地域住民324名へ無記名式質問紙を配布し199名の回答を得た（回収率61.4%）。そのうち、A市以外に住む5名を除いた194名を分析対象とした。194名のうち同意の得られた5名と、A市の高齢者ボランティア支援の実務者7名にインタビューを実施した。

【結果・考察】調査の結果、高齢者ボランティア支援においては、〔求めるボランティア内容や手続きに関する情報を住民が受け取ることができる丁寧な周知〕を含む5つの課題が明らかとなった。関心はあるものの、成人期は学業や仕事、子育てなどによりボランティアへ時間を費やすことが難しく、老年期を迎え、いざボランティアに参加しようと思った時には、ボランティア活動に関する情報の受け取りや選択、自身の能力とのマッチングへの不安が参加への障壁になることが推察された。ボランティアを身近なことと感じ、学童・青年期のうちから、ボランティアの情報に触れることでボランティアのイメージの醸成を図ることの必要性が示唆された。

キーワード：高齢者ボランティア活動、成人・高齢者、混合研究方法

Key Words : Elderly volunteer activities, Adults and the elderly, Mixed methods research

I. はじめに

地域包括ケアシステムにおいて、すべての基本となる概念は、自分が主体となり可能な限り自らを支えるという「自助」である。そして、次に重要とな

るのが、インフォーマルな相互扶助を示す「互助」であり、ボランティア活動は、この互助に含まれる。高齢者がボランティアを担うことは、高齢者にとっても社会参加の機会となり、フレイル予防など高齢者の健康増進にもつながる（吉澤, 田中, 高橋, 他 2019）。また、山内（2006）は、ボランティア活動や市民活動に積極的に関わっている人は、社会意識が高く、生活態度もポジティブで、それがソーシャル・キャピタルという形で地域の問題解決能力を高めていると述べており、ボランティア活動への参加

著者連絡先：*黒河内仙奈

神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科

E-mail : kurokochi-mgv@kuhs.ac.jp

(受付 2022.9.6 / 受理 2022.12.5)

の重要性を指摘している。

一方で、全国社会福祉協議会による全国調査(2010)によると、ボランティア活動を行っている者は「60代」がもっとも多く、全体の40.9%、ついで「70代」と「50代」がそれぞれ2割前後の割合で続いており、ボランティア歴3年未満の割合が1割強にとどまっていた。このことは、ボランティアへの近年の新規参加者が少なく、ボランティアが過去からの継続的な参加者に支えられ、次代の中核となるべき層が育成されにくいという問題を示している。これらのことから、超高齢社会において、高齢者と次世代を担う成人の高齢者ボランティア(「高齢者自身によるボランティア」と「高齢者を支援するボランティア」の両方を含む)の人材確保および育成が急務である。

II. 研究目的

本研究の目的は、成人・高齢者への質問紙調査および高齢者ボランティア支援の実務者を含む対象者へのヒアリングにより、高齢者ボランティア活動の支援における課題を抽出することである。

III. 研究方法

本研究は、高齢者ボランティア活動への関心およびニーズをより深く理解するために、収斂デザインを用いた混合研究法を行い(Fetters 2013)、5つの段階にて実施した(図1参照)。

1. 第1段階：【研究1】住民への質問紙調査

(1)研究対象者および調査方法

2019年11月に研究者が所属する機関で開催した大学祭および地域住民向けのフォーラムに会場した18歳以上の参加者324名へ質問紙を配布し、199名の回答を得た(回収率61.4%)。そのうち、A市以外に住む5名を除いた194名を分析対象とした。

(2)調査内容および分析方法

無記名式質問紙調査を実施した。調査票は、①基本属性(性別、年代、家族構成など)、②高齢者ボランティアに関する意識(活動への参加状況、動機、関心のあるボランティア領域、必要な支援など)で構成した。調査票の回収は、大学祭の会場に回収箱を設置し、フォーラムの参加者には返送用封筒を配布し、郵送にて回収した。調査票の各調査項目につ

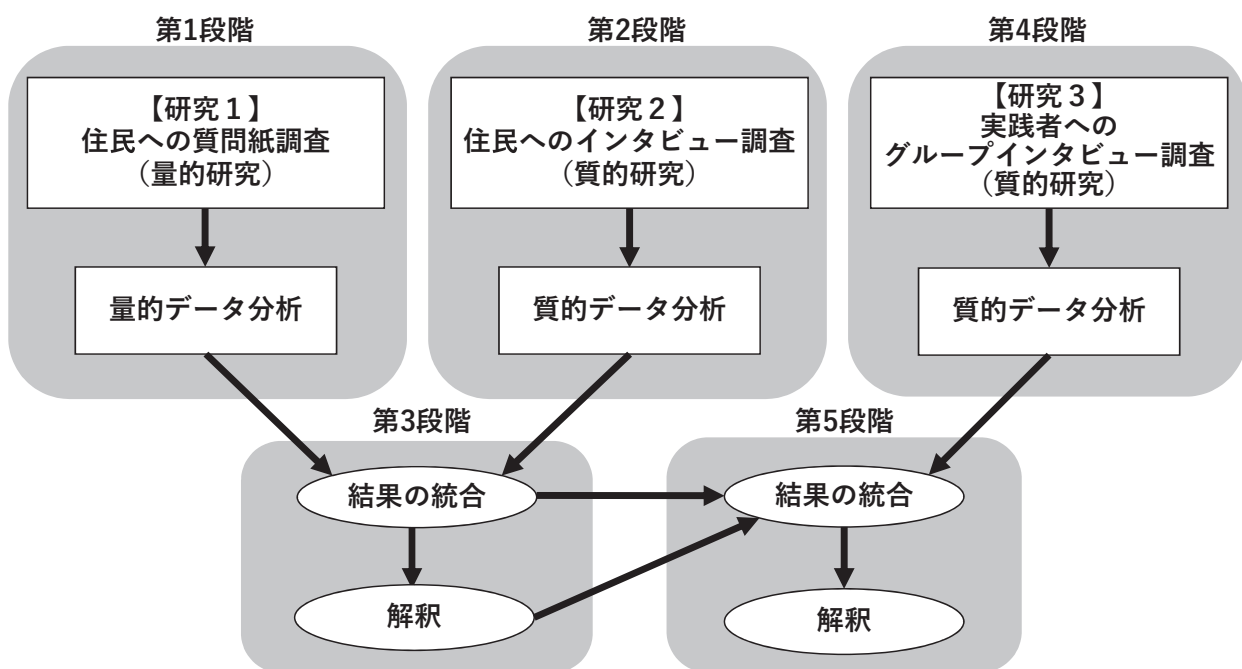


図1 研究のプロセス

いて、記述統計により対象者の属性やスコアの集計を行った。

2. 第2段階：【研究2】住民へのインタビュー調査

(1) 研究対象者および調査方法

研究1の調査票と一緒に研究2への協力依頼に関する依頼文書と意向確認書を配布した。研究2への参加を希望する場合は、研究対象者の連絡先を記入し研究者宛てに郵送してもらった。2019年12月に、意向確認書の返送があった5名へインタビューを実施した。なお、高齢者ボランティア活動にどのような支援を必要としているかを抽出するために、これまでに高齢者ボランティア活動へ参加していない者を対象とした。

(2) 調査内容および分析方法

研究1の質問紙調査の内容について、より詳細に選択の理由を問う内容とした。インタビューの内容は逐語録を作成後、内容分析を行った。

3. 第3段階：研究1と研究2の結果の統合と解釈

ジョイントディスプレイを作成し、研究1と研究2の結果を統合し、A市の高齢者ボランティア活動における支援の課題についてデータの解釈を行った。

4. 第4段階：【研究3】高齢者ボランティア支援の実務者へのグループインタビュー調査

(1) 研究対象者および調査方法

2020年12月に、A市内の高齢者ボランティア支援の関連施設において、高齢者ボランティア支援に関わる実務経験2年以上の職員7名へグループインタビューを実施した。

(2) 調査内容および分析方法

A市における高齢者ボランティア支援の現状、支援をする上での困難、課題を問う内容とした。インタビューの内容は逐語録を作成後、内容分析を行った。

5. 第5段階：研究1・2と研究3の結果の統合と解釈

ジョイントディスプレイを作成して、研究1・2と3の結果を統合し、A市の高齢者ボランティア活動における支援の課題に関するデータの解釈を行った。

6. 倫理的配慮

研究1は無記名での調査のため、研究2の研究協力者の募集にあたっては、研究1との連結を遮断するために、調査票の回収と分けて、別途郵送にて協力者を募った。なお、本研究は研究者が所属する機関の倫理審査委員会の承認を得て行った（保大第17 - 49）。

IV. 結果

1. 第1段階：【研究1】住民への質問紙調査

(1) 研究対象者の概要

対象者は男性81名（41.8%）、女性111名（57.2%）、年代は人数が多い順に40歳代30名（15.5%）、70～74歳代29名（14.9%）、50歳代28名（14.4%）であり、65歳未満が全体の6割を占めた（121名、62.4%）（表1）。

(2) 高齢者ボランティア活動への参加状況

対象者のボランティア参加状況は、参加68名（35.1%）、不参加110名（56.7%）、以前に活動していたが現在は不参加15名（7.7%）であった。

不参加110名のうち、ボランティアへ興味がある97名（88.2%）の不参加の理由は、「時間がない63名（64.9%）」が最も多く、10歳代から50歳代のすべての年代で最も多い割合を占めた。60～64歳代では「自分に務まるか分からない」が最も多く、次いで「どのような分野のボランティアがあるかわからない」が多かった（表2）。

また、ボランティア活動をはじめするために必要な環境整備と社会資源は、「活動の機会やボランティア団体・グループに関する様々な情報紹介」が全体で105名（95.5%）と最も多かった。

表1 研究対象者の概要 (n=194)

		人数 (%)			人数 (%)	
性別	男性	81 (41.8)	近所づきあい	とても親しく付き合っている	20 (10.3)	
	女性	111 (57.2)		わりと親しく付き合っている	68 (35.1)	
	無回答	2 (1.0)		自治会・町会等の行事の時だけ付き合う	17 (8.8)	
年代	10歳代	11 (5.7)		付き合いはするが、それほど親しくない	24 (12.4)	
	20歳代	9 (4.6)		合えばあいさつする程度	57 (29.4)	
	30歳代	27 (13.9)		付き合いはほとんどない	8 (4.1)	
	40歳代	30 (15.5)	活動・グループへの	運動関係のグループやクラブ	56 (28.9)	
	50歳代	28 (14.4)	参加	趣味関係のグループやクラブ	47 (24.2)	
	60歳代	60~64歳	16 (8.2)	(複数回答)	学習・教養サークル	27 (13.9)
		65~69歳	19 (9.8)		老人クラブ	11 (5.7)
	70歳代	70~74歳	29 (14.9)		町内会・自治会	68 (35.1)
		75~79歳	15 (7.7)		その他	33 (17.0)
	80歳以上	10 (5.2)		無し	43 (22.2)	
職業	企業(被雇用者)	20 (10.3)	活動・グループへの	4個	6 (3.1)	
	公務員	16 (8.2)		3個	16 (8.2)	
	自営業	11 (5.7)	1人あたりの	2個	41 (21.1)	
	団体職員(社会福祉法人、社会福祉協議会等含む)		14 (7.2)	参加件数	1個	88 (45.4)
					0個	43 (22.2)
	NPO・NGO職員	12 (6.2)				
	定年退職後の方	14 (7.2)	ボランティア	はい	68 (35.1)	
	学生	16 (8.2)	アの参加状況	いいえ	110 (56.7)	
	主婦・主夫(仕事をもっていない方)	54 (27.8)	況	以前は活動していたが、今は参加していない	15 (7.7)	
	仕事には就いていない	18 (9.3)		無回答	1 (0.5)	
	その他	19 (9.8)	ボランティア	困っている人を助けたい	71 (36.6)	
	世帯構成	独居	40 (20.6)	アへ興味を	地域や社会を知りたい	58 (29.9)
		夫婦のみ	50 (25.8)	もった(もっている)理由	自分の知識や技術を活かす機会がほしい	52 (26.8)
夫婦とその親		3 (1.5)	(複数回答)	社会やお世話になったことに対する恩返しをしたい	52 (26.8)	
夫婦とその子		64 (33.0)		地域や社会を自分たちで住みよくなり改善していく活動に関わりたい	50 (25.8)	
自分と実親		7 (3.6)		これまでの経験を活かしたい	49 (25.3)	
自分と子		5 (2.6)		生きがいになるものがほしい	48 (24.7)	
自分と孫		3 (1.5)		自分自身の関心や趣味の活動をつなげたい	47 (24.2)	
三世帯		14 (7.2)		何か楽しいことをしたい	46 (23.7)	
その他		8 (4.1)		仲間づくりがしたい	46 (23.7)	
				自分の人格形成や成長につながることをしたい	42 (21.6)	
健康状態	非常に健康	38 (9.8)		今までの生活とは違うことをしたい	25 (12.9)	
	まあまあ健康	136 (9.8)		非営利活動や社会貢献活動というものに関心がある	19 (9.8)	
	あまり健康ではない	12 (9.8)		友達や仲間誘われる	19 (9.8)	
	健康ではない	7 (9.8)		暇であるため	10 (5.2)	
	無回答	1 (9.8)		学校・職場で勤められる	8 (4.1)	
経済状況	十分満足	19 (9.8)		特に理由はなく、なんとなく始めたい	4 (2.1)	
	やや満足	64 (33.0)		その他	6 (3.1)	
	どちらでもない	61 (31.4)				
	やや不満	41 (21.1)				
	不満	8 (4.1)				
	無回答	1 (0.5)				

2. 第2段階：【研究2】住民へのインタビュー調査

(1)研究対象者の概要

対象者は男性2名、女性3名であり、30代2名、50代1名、70代2名であった。

(2)高齢者ボランティア活動へ興味はあるが不参加の理由(表2)

対象者(地域住民)の語りを「斜字」として以下

に記す。

高齢者ボランティア活動に対して、4名が「興味はある」「どちらかと言えば興味がある」との反応であったが、「興味はあるけれどもどのような分野があるか分からない」(50代男性)と、ボランティアに関する情報を知るに至っていない状況であった。

ボランティアへ興味はあるが不参加の理由について、「まだ子どもが小さいので、時間が取れないです」

表2 ボランティア不参加者における高齢者ボランティアへの興味・不参加の理由・必要な支援に関するジョイントディスプレイ

量的データ(質問紙調査の結果,n=110)	人数 (%)	質的データ (参加者の語り, n=5)	『統合した結果の解釈』	
ボランティアへの興味				
ある	97 (88.2)	<興味あり> 「興味はあるけれどもどのような分野があるか分からない」(E氏, 50代男性) 「先月、定年退職で仕事を辞めたので、今後、何をして暮らすかというようなことを模索中でして、その一つとしてボランティアもあるのかなと・・・」(A氏, 70代男性)	『ボランティアの機会がないことが興味の無さにつながる可能性がある』	
ない	12 (10.9)			
無回答	1 (0.9)			
		<興味なし> 「(ボランティアに)誘われることも特にないし・・・。別に、絶対嫌だってわけじゃないんです。そういう機会がなかったから、興味もあまりなかったんです」(B氏, 30代女性)		
興味はあるが不参加の理由 (複数回答)				
時間がない	63 (64.9)	「まだ子どもが小さいので、時間が取れないです」(C氏, 30代女性)	『ボランティアに費やす時間がないことに加え、世代によって不参加の理由が異なる可能性がある』	
自分に務まるか自信がない	25 (25.8)			
体力への不安	23 (23.7)	「手続きの方法が分からない、あとは、どのような(分野の)ボランティアがあるか分からないし、自分に務まるか自信がないから、やっぱりいまひとつ、やろうという気持ちになれなかったっていうことでしょうね」(A氏, 70代男性)		
どのような分野のボランティアがあるか分からない	18 (18.6)			
手続きの方法がわからない	16 (16.5)			
経済的な負担(交通費の自費払いなど)	14 (14.4)	「住所はこちらにあっても、勤務地がこちらではないので、どうしてもあんまりこっちのことがよく分からないんです」(D氏, 50代男性)		
(参加者同士の)人間関係への不安	8 (8.2)			
その他	5 (5.2)			
1か月あたりボランティアに使える時間				
5時間未満	40 (36.4)	「住所はこちらにあっても、勤務地がこちらではないので、どうしてもあんまりこっちのことがよく分からないんです」(D氏, 50代男性)		
5~10時間未満	32 (29.1)			
10~20時間未満	14 (12.7)			
20~30時間未満	4 (3.6)			
30時間以上	5 (4.5)			
無回答	15 (13.6)			
ボランティア活動をはじめするために必要な環境整備と社会資源 (複数回答)				
活動の機会やボランティア団体・グループに関する様々な情報紹介	105 (95.5)	「ないのか、見れてないのか、探せてないだけなのか分からないですけど、自分の生活の中ではそういう情報っていうのはあまりないですよ」(C氏, 30代女性)	『ボランティアに関する情報が、住民が求める情報と合致していない可能性がある』	
活動に必要な知識や技術を研修できる機会があること	69 (62.7)			
活動に関して気軽に相談できる窓口が整備されていること	60 (54.5)	「やはりどういうものがあるかとか、そういう情報が不足してるというか、目に入ってこないっていうんですか、あまり見たことがない。どういう人を募集してるのかというのも、あんまりそういう情報がないような気がするんですよ」(E氏, 70代女性)	『ボランティアに関する気がかりなことについて気軽に相談ができる体制が求められている』	
活動や研修に必要な経費の援助	55 (50.0)			
活動の経験が社会的な資格取得につながる	37 (33.6)			
活動の経験が、進学・就職時に評価されること	27 (24.5)		『住民はボランティアに参加することの利点を求めている』	
その他	11 (10.0)			
特になし	7 (6.4)			

(30代女性)と子育てによる時間の確保が困難であることや、「手続きの方法が分からない、..(中略)..自分に務まるか自信がないから、やっぱりいまひとつ、やろうという気持ちになれなかったっていうことでしょうね」(70代男性)と、ボランティア活動に参加するまでの手続きの不明確さや自身の能力と

のマッチングへの不安が語られた。

(3)ボランティア活動をはじめするために必要な環境整備と社会資源

70代女性は、「やはりどういうものがあるかとか、そういう情報が不足してるというか、目に入ってこ

ないっていうんですか、あまり見たことがない。ど
ういう人を募集してるのかというの、あんまりそ
ういう情報がないような気がするんですよ」と、生
活の中で情報を目にする機会や求められる能力につ
いての情報の不足を述べた。

3. 第3段階：【研究1】と【研究2】の結果の統 合と解釈（表2）

対象者（地域住民）の語りを「斜字」、研究1と
研究2を統合した結果の解釈を『 』として記す。

ボランティアへの興味について、「興味がない」
と回答した場合でも、「(ボランティアに) 誘われる
ことも特にないし…。別に、絶対嫌だってわけじゃ
ないんです。そういう機会がなかったから、興味も
あまりなかったんです」と、ボランティアに否定的
な反応ではなく、背景として、『ボランティアの機
会がないことが興味の無さにつながる可能性があ
る』ことが明らかとなった。

次に、興味はあるが不参加の理由として、70代男
性から「どのような分野があるか分からない」との
語りがあり、30代女性の「時間が取れない」といっ
た『ボランティアに費やす時間がないことに加え、
世代によって不参加の理由が異なる可能性がある』
ことが示唆された。

また、ボランティア活動をはじめするために必要な
環境整備と社会資源として、住民は情報を提供して
もらいたいと感じている一方で、「どういった人を募
集してるのかという情報がない」というように、『ボ
ランティアに関する情報が、住民が求める情報と合
致していない可能性がある』ことが明らかとなった。
そして、「活動に関して気軽に相談できる窓口が整
備されていること」を求める回答が60名（54.5%）
と半数を超え、『ボランティアに関する気がかりな
ことについて気軽に相談ができる体制が求められて
いる』ことがわかった。さらに、6割以上が「活動
に必要な知識や技術を研修できる機会があること」
と回答し、ボランティア経験が資格取得や進学・就
職で評価されるといった、『ボランティアに参加す
ることの利点を求めている』ことが明らかとなった。

4. 第4段階：【研究3】高齢者ボランティア支援 の実務者へのグループインタビュー調査

(1) 研究対象者の概要

対象者は7名であり、男性3名、女性4名、A市
役所の高齢者支援に関わる2つの担当課の職員で
あった。

(2) 高齢者支援の実務者が捉える高齢者ボラン ティア支援における課題（表3）

対象者（実務者）の語りを「斜字」高齢者支援の
実務者が捉える高齢者ボランティア支援における課
題を【 】内に記す。

高齢者ボランティア活動の促進にむけて、住民に
対して様々な広報活動を行っているものの、「(文字
数の制限や紙面の都合で) 広報誌に内容の詳細を記
載することができない」、「市が広いので、エリアご
とで研修会を開こうとしても、その周知でさえもす
ごく大変」と【必要な情報を十分に周知するには限
界がある】と語った。また、「周知が一体的ではな
いかなど。それぞれがいろいろな方法で発信をして
るんですけど、それをキャッチする人っていうのも
限られてはいるんだと思います」と、情報が多様で
あるがゆえに、【住民が情報を受け取りにくい】状
況の可能性について述べた。さらに「常に一緒に参
加してくれる人を募集していることを発信すると新
規の参加につながりやすいが、そのことについて発
信ができていない」と【参加しやすい募集方法を発
信し続ける】ことで、気軽に活動への申込や参加が
できることにつなげることの必要性が挙げられた。

つぎに、「いかに自分が活動をした方が良いらし
いっていうのを分かってもらうところからやらなけ
れば、ボランティアやりましょうと言っても(情報
が) 目に入らないと思う」と、情報があっても【関
心がなければ情報が目に留まらない】ことの
課題を述べた。また、「やらされてる感がないよう
に活動に参加してもらえるか」のように、自主的な
参加ではなく、町内から順番に選出された住民に対
して、【住民の能動的な活動への動機付け】が課題
であると述べられた。さらに、「若いうちにボラン
ティア活動をやったとか、パラスポーツをやったこ
とがあるとか、そういう経験ってその後生きてく
るので、ボランティアの閾値を下げるというか、ボ

表3 実務者が捉える高齢者ボランティア支援における課題

対象者の語り	語りの要約	【カテゴリー】
（文字数の制限や紙面の都合で）広報誌に内容の詳細を記載することができない	広報誌のみでは情報の記載に限りがある	【必要な情報を十分に周知するには限界がある】
市が広いので、エリアごとで研修会を開こうとしても、その周知さえもすごく大変。町内会の回覧板も町内会長さんの理解が得られないとなかなか難しい	研修会の周知に労力を要する	
周知が一体的ではないかなと。それぞれがいろいろな方法で発信してるんですけど、それをキャッチする人も限られている	情報を発信しているが、住民がキャッチしづらい	【住民が情報を受け取りにくい】
地域が広いというだけでなく、コーディネーター役にになれる人がいないことで、身近なエリアごとの情報を、探しづらいという現状あるかもしれない	地域が広く、コーディネーター役がいないと情報を受け取りづらい	
常に一緒に参加してくれる人を募集していることを発信すると新規の参加につながりやすいが、そのことについて発信ができていない	参加しやすい募集方法を発信し続けることが難しい	【参加しやすい募集方法を発信し続ける】
チラシや広報誌を配布したり、配架したりしているが、動機などなければ目に留まらないと思う	関心がなければ情報が目に留まらない	【関心がなければ情報が目に留まらない】
いかに自分が活動をした方が良いらしいというのを分かってもらうところからやらなければ、ボランティアやりましょうと言っても目に入らないと思う		
活動紹介をパネル展示する場所が限定的であるため、より多くの人の目に触れる機会を増やしたい		
テーマも健康長寿というテーマになっていて、そもそも高齢者向けの内容にしているというところもある	研修会等は高齢者向けのテーマが多く、若者が興味を持たない	【住民の能動的な活動への動機付け】
やらされてる感がないように活動に参加してもらえるか。そういうふうにとっていくというのが少し、もどかしさがある	（住民が）やらされてる感がないような参加が思うようにしていない	
集められた人に、どうやって能動的に考えてもらうか、工夫を考えたかなければならないことがすごく難しい	住民の能動的な活動につなげるための工夫を考えなければならない	【ボランティアへのイメージの醸成】
若いうちにボランティア活動をやったとか、バラスポーツをやったことがあるとか、そういう経験ってその後生きてくるので、ボランティアの関心を下げるといって、ボランティア活動は特別なことではないという教育があってもいいと思うんです	若者にボランティア活動は特別なことではないという教育を行うことが必要である	
後継者問題はあるが、後継者なんて別にいなくてもよくて、やりたいと思った人が集まって、何か活動してみようよっていう、それでもいいんだよみたいな、そういう啓発みたいなことが必要ですね	気軽に活動に取り組んでも良いんだということを知ってもらう	【スケジュールが合わない】
活動してるのが基本的に平日の午前中だったりするので、それに活動して下さるっていうと、なかなか若い人は難しい	事業や活動が平日であるため成人の参加は難しい	
50代の方などは結構、働いていらっしゃる方が多くてですね。A市は完全無償ということで、自分で交通費も出して来ていただくという形なので、ご自身の予定が最優先なんです	参加することの優先度が高くない	【新規参加が少ない（いない）】
みんなリーダーになりたくないんです	リーダーを担いたくない	
現在は活動ができていますが、新規の若い人の参加がなく、後継者がいない	若い人の参加がない	【活動場所の確保】
（有料化やスペースの確保など）物理的な活動の場を確保することが難しい。町内会に入っていない人は、そのような場を使うことすらできない	活動場所を確保することが難しい	
高齢者の方が暮らしを続けていく上で、できるだけその地域で暮らすために何が必要なのか、何に困ってるのか、地域の人に知ってもらうっていう意味でも、一緒に話し合える関係性をつくる意味でも、その地域の課題が何かっていうのをみんなで話せないと駄目なんだろうなって思います	各地域の課題について、住民と支援側と一緒に話し合える関係性を築かなければならない	【住民と支援側の関係性の構築】
囲碁のクラブでもいいし、何でもいいんですけど、そういうのやりませんかというところから入って、顔見知りになってきて、地域に愛着があって初めてそういうことが、言われたときに根付くのであって、われわれは大上段に構えて、地域で支えてもらわないとみたくところから入るとうまくいかない	住民が身近なところから参加をし、関係性を築いてからでなければ（ボランティア等の）活動への参加は難しいことを支援側が理解する	

ランティア活動は特別なことではないという教育があってもいいと思うんです」と、ボランティアを身近なものと感じて、気軽に参加できるよう、学童・青年期のうちから、ボランティアの情報に触れることによって【ボランティアへのイメージの醸成】を図ることの課題が挙げられた。

また、「活動してるのが基本的に平日の午前中だったりするので、活動して下さるっていうとなかなか若い人は難しい」と期待する活動日と【スケジュールが合わない】ことが挙げられた。また、「(参加者は)みんなリーダーになりたくないんです」「現在は活動ができていけれど、新規の若い人の参加がないので、後継者がいないんです」と【新規参加が少ない(いない)】ことで活動の継続に向けた懸念を語った。つぎに、「(有料化やスペースの確保など)物理的な活動の場を確保することが難しい」といった【活動場所の確保】についての課題が語られた。さらに、地域ごとに課題が異なることについて、「高齢者の方が暮らしを続けていく上で、できるだけその地域で暮らすために何が 필요한のか、何に困ってるのか、地域の人に知ってもらってという意味でも、一緒に話し合える関係性をつくる意味でも、その地域の課題が何かあっていうのをみんなで話せないと駄目なんだろうなって思います。」と【住民と支援側の関係性の構築】によって、地域に合った支援方法を検討することが挙げられた。

5. 第5段階：【研究1・2】と【研究3】の結果の統合と解釈(表4)

研究1・2と研究3を統合した結果の解釈を〔 〕として記す。

A市の高齢者ボランティア活動支援における課題について、「どのような分野のボランティアがあるか分からない」「手続きの方法がわからない」といった理由のように、住民がボランティアに関する情報が、住民が求める情報と合致していないと感じる一方で、実施者が十分な周知や住民の情報の受け取りにくさ、情報を発信し続けることの困難を挙げていた。このことから、住民がボランティア内容や手続き方法など、どのような情報を必要とし、必要とする人へ情報が届くように、〔求めるボランティア内容や手続きに関する情報を住民が受け取ることがで

きる丁寧な周知〕が課題であることがわかった。

つぎに、必要な情報の不足だけではなく、関心が向かないことで情報が目に留まっていないことや、多様な情報であるがゆえに、必要な情報を受け取れていないことの可能性が明らかとなった。前述のように、住民が情報を受け取ることができるための提供方法の工夫や、住民が自分の能力に応じて選択できるための掲載する情報の内容の工夫とともに、高齢者ボランティアに関心を持てるための学童・青年期からの教育を行うことが必要であり、〔興味を持ってもらい、ボランティアにつなぐための動機付けの工夫〕が課題として明らかとなった。

また、住民の対象者の8割以上が高齢者ボランティアへの興味を示したものの、現時点で高齢者ボランティア活動に不参加である理由として、成人期は学業や仕事、子育てによって、求められる時間帯や日程で時間を確保することが難しいことが明らかとなった。また、求められる活動が、自分の体力や能力でできるかわからないといったマッチングへの不安から不参加に至っていることがわかった。このことから、〔短時間でも参加が可能となる柔軟な活動内容の検討と場所の確保〕の必要性が明らかとなった。

さらに、住民はボランティア活動について様々な不安を抱き、それに対する相談窓口を望んでいた。このことから、住民と支援側(実践者)がともに地域の課題について話し合うことができるよう〔住民と支援者(行政等)との関係性の構築とともに参加への不安の解消・経済的負担の軽減ができる相談の仕組みづくり〕が課題として挙げられた。

最後に、ボランティアに参加するための研修に参加したり、ボランティアをすることでの資格取得や活動の経験が進学・就職時に評価されたりするといった〔参加することの社会的評価や承認の制度・仕組みづくり〕を望んでいることも明らかとなった。

V. 考察

地域住民への質問紙調査とインタビュー調査、ならびに高齢者ボランティア支援の実務者へのインタビュー調査から抽出された高齢者ボランティア支援における5つの課題について考察する。

表4 高齢者ボランティア支援の課題に関するジョイントディスプレイ

『研究1と2を統合した結果の解釈』／ 量的データ・質的データ	【実務者が捉える課題】／ 質的データ	〔研究1・2・3を統合した結果の解釈〕 (課題)
<p>『ボランティアに関する情報が、住民が求める情報と合致していない可能性がある』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の機会やボランティア団体・グループに関する様々な情報紹介 105名(95.5%) ・どのような分野のボランティアがあるか分からない 18名(18.6%) ・手続きの方法がわからない 16名(16.5%) 	<ul style="list-style-type: none"> 【必要な情報を十分に周知するには限界がある】 【住民が情報を受け取りにくい】 【参加しやすい募集方法を発信し続ける】 	<p>〔求めるボランティア内容や手続きに関する情報を住民が受け取ることができる丁寧な周知〕</p>
<p>『ボランティアの機会がないことが興味の無さにつながる可能性がある』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアへの興味あり 97名(88.2%) ・「(ボランティアに)誘われることも特にないし・・・。別に、絶対嫌だってわけじゃないんです。そういう機会がなかったから、興味もあまりなかったんです」(B氏, 30代女性) 	<ul style="list-style-type: none"> 【関心がなければ情報が目に留まらない】 【住民の能動的な活動への動機付け】 【ボランティアへのイメージの醸成】 	<p>〔興味を持ってもらい、ボランティアにつながるための動機付けの工夫〕</p>
<p>『ボランティアに費やす時間がないことに加え、世代によって不参加の理由が異なる可能性がある』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間がない 63名(64.9%) ・1か月あたりのボランティアに使える時間：5時間未満 40名(36.4%) ・「まだ子どもが小さいので、時間が取れないです」(C氏, 30代女性) 	<ul style="list-style-type: none"> 【スケジュールが合わない】 【新規参加者が少ない(いない)】 【活動場所がない】 	<p>〔短時間でも参加が可能となる柔軟な活動内容の検討と場所の確保〕</p>
<p>『ボランティアに関する気がかりなことについて気軽に相談ができる体制が求められている』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動に関して気軽に相談できる窓口が整備されていること 60名(54.5%) ・自分に務まるか自信がない 25名(25.8%) ・体力への不安 23名(23.7%) ・(参加者同士の)人間関係への不安 8名(8.2%) ・活動や研修に必要な経費の援助 55名(50.0%) ・経済的な負担(交通費の自費払いなど) 14名(14.4%) 	<ul style="list-style-type: none"> 【住民と支援側の関係性の構築】 	<p>〔住民と支援者(行政等)との関係性の構築とともに参加への不安の解消・経済的負担の軽減ができる相談の仕組みづくり〕</p>
<p>『住民はボランティアに参加することの利点を求めている』</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の経験が社会的な資格取得につながること 37名(33.6%) ・活動の経験が、進学・就職時に評価されること 27名(24.5%) 	<p>なし</p>	<p>〔参加することの社会的評価や承認の制度・仕組みづくり〕</p>

1. 求めるボランティア内容や手続きに関する情報を住民が受け取ることができる丁寧な周知

本調査により、住民が高齢者ボランティア活動へ不参加であることの理由に、「どのような分野のボランティアがあるか分からない」や「手続きの方法がわからない」といった情報の不足が挙げられた。また、必要な支援についても、多くの世代で「活動の機会やボランティア団体・グループに関する様々な情報紹介」を挙げており、住民が情報を求めていることが明らかとなった。一方で、インタビューの結果から、住民へのボランティアについての情報が量的に不足しているのではなく、住民が情報を汲み取ることの難しさや、住民の求める情報との不一致の可能性が唆された。藤本（2015）は、情報をわかりやすくするためのデザインとは、「複雑な情報を整理し、わかりやすく編集して伝える」ことと「情報や知識への煩雑な経路を、わかりやすく構造化して道筋を立てる技術」であると述べている。本研究で実務者が指摘したように、住民が情報を受け取るためのシステムを整理するとともに、多様な情報がある中で、その情報をコーディネートする人材の確保が課題であると言える。

また、メディアを通じた啓発により理解が深まる（藤原・杉原・新開 2001）ことから、まずは住民が関心を寄せて情報に目を向けることができるように、情報発信の媒体の選定や信頼性を担保しつつ魅力的にみえる仕掛けを創ることが必要である。しかし、これらを各地域のボランティアセンターの職員が担うには限界がある。三宅（2017）は、アートプロジェクトにおけるボランティア活動の持続要因について、さまざまな参加目的を持った者が長期的に交流することによりボランティアコミュニティを通じたフィードバックが重層化し関係性の構築、強化が図られることを明らかにしている。したがって、情報処理、メディアデザイン、広報などの得意分野をもつボランティアを地域から募ったり、産学官の協働を促したりするなど、既存のボランティアセンターの情報発信システムの再構築に参画する組織づくりから、再構築の過程を発信するというように、地域に対して透明性の高い取り組みを展開することが求められる。

2. 興味を持ってもらい、ボランティアにつながるための動機付けの工夫

本研究では住民から、ボランティア活動に対して、ハードルの高さを感じ、参加に結びつきにくいことが指摘された。これに対し、実践者からはボランティアとは敷居の高いものではなく、身近なサークル活動のような参加しやすい活動から始めることが必要であると語られた。このように、ボランティアを身近なものと感じて、気軽に参加できるよう、【ボランティアへのイメージの醸成】を図ることの課題が挙げられた。山本・松井（2014）が中高生へ行った調査では、ボランティア動機は「興味・関心動機」「自己志向的動機」「他者志向的動機」「外発性動機」の4つにわかれ、成人だけではなく、中・高生においてもボランティア動機が複数存在することが確認され、「外発性動機」については、学校の先生や、家族の影響により活動に参加したという、成人のボランティア動機には見られない学齢期特有の動機を認めた。このことから、成人になってボランティアに関する情報に触れるのではなく、学童・青年期からボランティアに関する情報に触れることは、ボランティアに対するハードルを感じることなく、身近なものとして、活動に参加することにつながる。一方、高齢者は、孫との交流が生きがいとなり、主観的幸福感を高める（山崎・角間・草野 2004）。また、中村・浜・後藤（2007）は、周囲の人々の援助が豊かで、孫が身の回りにいない高齢者であっても孫の存在が主観的幸福感を向上させる要因になることを明らかにしている。したがって、異年齢間交流は高齢者にとっても受け入れやすいものであると考える。

3. 短時間でも参加が可能となる柔軟な活動内容の検討と場所の確保

高齢者ボランティア支援への関心はあるものの、成人期は学業や仕事、子育てなどによりボランティアへ時間を費やすことが難しく、老年期を迎え、いざボランティアに参加しようと思った時には、ボランティア活動の選択や自身の能力とのマッチングへの不安が参加への障壁になることが推察された。

田村・服部・辻（2021）は、高齢者のボランティアグループ参加は、月1回以上の頻度で3年後のう

つ発症リスクを抑制すると報告している。つまり、短時間の参加でも高齢者のボランティア活動による効果が期待できるため、高齢者自身が自己への利点を自覚し、「短時間でも参加してみよう」と思えることが参加の促進につながる。

また、「時間がないとボランティアに参加できない」のではなく、「時間の長短に関わらず参加できるボランティアは何か」「生活を豊かにできるボランティアは何か」というような発想の転換を促すことができる機会の提供・教育が今後の課題である。

4. 住民と支援者（行政等）との関係性の構築とともに参加への不安の解消・経済的負担の軽減ができる相談の仕組みづくり

本調査では、実践者から「住民に地域のことを知ってもらう」「愛着をもってもらう」という語りが聞かれた。ボランティア活動に関する実態調査（全国社会福祉協議会 2010）では、ボランティア活動の参加動機について、男性では「地域や社会を改善していく活動に関わりたかった（42.1%）」が最も多かった。これは、住民と支援者が関係性を築き、住民に地域のことを知ってもらうことがボランティア活動につながることを示しており、本研究の結果を支持するものといえる。

さらに、ボランティア団体を対象とした調査において、支援機関に期待している支援は、「活動費等の助成」が166団体のうち43団体（25.9%）と全体の4分の1を占め、「事務所や活動拠点の提供」16団体9.6%、「ボランティア募集への協力」15団体9.0%、「活動・組織運営に関する相談」が13団体7.8%であり、ボランティア活動に関する支援者（行政等）への期待は多岐にわたる。一方で、ボランティアやNPOに対する行政側の窓口や担当者が必ずしも明確でないために、安定的な関係を形成していくことが困難である（「広がれボランティアの輪」連絡会議, 1996）と指摘されており、相談窓口の担当者が交代しても住民との関係を継続できることが今後の課題であるといえる。

5. 参加することの社会的評価や承認の制度・仕組みづくり

先行研究により、ボランティアに参加することは、

フレイル予防やキャリア形成に良い影響があると言われている（川路 2020；吉澤・田中・高橋 2019）。これらの内的報酬に対し、本調査では、住民が「活動の経験が社会的な資格取得につながる」や「進学・就職時に評価される」のような外的報酬や評価あるいは承認を求めていることがわかった。外から動機づけられるよりも自分で自分を動機づけるほうが、創造性、責任感、健康な行動、変化の持続性といった点で優れていると言われている（Deci 1999：12）。その一方で、ボランティア経験が第三者に評価・承認されることは、青年・成人期からボランティア活動に興味をもち、活動の継続につながるきっかけになる。そのため、今後、ボランティアに必要な能力が明文化され、その能力を獲得するための研修や資格取得の機会、そしてボランティア経験が社会的評価につながる系統的な仕組みが整うことが期待される。

VI. 研究の限界

本研究では、研究1、研究2の研究対象者が、本学でのイベントへの来場者であることから、A市における地域住民の特性を反映しているとは言い難い。また、郵送にて研究2への参加希望の申し出のあった者のみを対象者として選定し、追加の募集は行わなかったことで、対象者の年代に偏りが生じたことも今回の研究の限界であると言える。さらに、高齢者ボランティア活動にどのような支援を必要としているかを抽出するために、これまでに高齢者ボランティア活動へ参加していない者を対象とした。その結果、「このような支援・環境があったから活動への参加につながった」といった成功体験が含まれていないため、ボランティア経験者の対象者を増やすことで、新たな支援に関する語りを得られる可能性があることが本研究の限界である。

VII. 謝辞

本研究にご協力をいただきました研究対象者の地域住民の皆様、ならびにA市役所の関係者の皆様へ深謝致します。

Ⅷ. 研究の資金源および利益相反

本研究は本学の2019年度地域貢献研究センター研究事業助成金により実施した。なお、本研究による利益相反はない。

引用文献

- Deci, E.L., Flaste, R. (1995) *Why we do what we do: The dynamics of personal autonomy*, G.P. Putnam's Sons. (=1999, 桜井茂監訳『人を伸ばす力—内発と自律のすすめ』新曜社)
- 藤本貴之(2015)「情報をわかりやすくするデザイン：情報デザインは「何であって」「何でない」のか」『情報の科学と技術』65(11), 450-456, doi.org/10.18919/jkg.65.11_450.
- 藤原佳典・高柳友子・高柳泰世(2001)「障害者が「介助犬」と生活することに関する地域住民の意識調査」『日本公衆衛生雑誌』48(5), 409-419.
- 「広がれボランティアの輪」連絡会議(1996)「行政とボランティア、NPOとのパートナーシップ、行政による支援のあり方に関する提言」<https://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryu/no.13/data/shiryu/syakaifukushi/580.pdf> (最終確認日：2022年11月6日)
- 川路康之(2020)「ボランティアとキャリア形成」『純真学園大学誌』10, 35-39, doi.org/10.18897/00000270.
- Fetters, M.D., Curry, L.A., Creswell, J.W. (2013). Achieving Integration in Mixed Methods Designs—Principles and Practices, *Health Serv Res*, 48(6 Pt 2), 2134-2156, doi: 10.1111/1475-6773.12117.
- 三宅美緒(2017)「アートプロジェクトにおけるボランティア活動の持続要因の考察：瀬戸内国際芸術祭で活動するボランティアの視点から」『北海道大学文化経済学』14(2), 55-64.
- 中村辰哉・浜翔太郎・後藤正幸(2007)「孫との関係に着目した高齢者の主観的幸福感に関する研究」『武蔵工業大学環境情報学部情報メディアセンタージャーナル』8, 75-86.
- 忍正人・忍博次(2017)「ボランティア活動とその成長を支えるもの：道新ボランティア奨励賞40周年・受賞団体の実態から」『地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報』1(35), 37-49.
- 田村元樹・服部真治・辻大士・近藤克則・花里真道・坂巻弘之(2021)「高齢者のボランティアグループ参加と個人のうつ傾向との関連：傾向スコアマッチング法を用いた3年間のJAGES縦断研究」『日本公衆衛生雑誌』68(12), 899-913, doi.org/10.11236/jph.21-014.
- 山崎美佐子・角間陽子・草野篤子(2004)「異世代間におけるネットワークの可能性—祖父母と孫の交流関係から—」『信州大学教育学部紀要』112, 99-110.
- 山本陽一・松井豊(2014)「中高生のボランティア動機、ボランティア活動の援助成果の探索的検討：感想文の内容分析を通して」『筑波大学心理学研究』47, 37-45.
- 山内直人(2006)「コミュニティと関係性の再構築—コミュニティ活性化とソーシャル・キャピタル」『公衆衛生』70(1), 6-9, doi.org/10.11477/mf.1401100214.
- 吉澤裕世・田中友規・高橋競・藤崎万裕・飯島勝矢(2019)「地域在住高齢者における身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係」『日本公衆衛生雑誌』66(6), 306-316, doi.org/10.11236/jph.66.6_306.
- 全国社会福祉協議会(2010)『全国ボランティア活動実態調査報告書』https://scb43a48fd0a99fa2.jimcontent.com/download/version/1332996660/module/5714270058/name/DD_08111830482620.pdf (最終確認日：2022年9月6日)